

魯迅輯『古小說鈎沈』校釈

—『幽明錄』(四)—

富永一登

31 漢武帝與羣臣宴於未央①、方噉黍臠②。忽聞人語云  
 ③、「老臣冒死自訴。」不見其形。尋覓良久④、梁上見  
 一老翁長八九寸⑤。面目頽皺⑥、鬚髮皓白⑦、拄杖僂步  
 ⑧、篤老之極⑨。帝問曰⑩、「叟姓字何⑪。居在何處。  
 何所病苦、而來訴朕。」翁緣柱而下、放杖稽首⑫、嘿而  
 不言⑬。因仰頭視屋⑭、俯指帝脚⑮、忽然不見⑯。帝駭  
 愕、不知何等。乃曰、「東方朔必識之。」於是召方朔以  
 告⑰。朔曰⑱、「其名爲藻居⑲、兼水木之精也⑳。夏巢  
 幽林㉑、冬潛深河㉒。陛下頃日頻興造宮室㉓、斬伐其居。  
 故來訴耳㉔。仰頭看屋、而復俯指陛下脚者、足也㉕。願  
 陛下宮室足於此也㉖。」帝感之㉗。既而息役㉘。  
 幸瓠子河㉙、聞水底有絃歌之聲㉚。前梁上翁及年少數  
 人㉛、絳衣素帶㉜、纓佩甚鮮㉝。皆長八九寸、有一人長  
 尺餘㉞。凌波而出㉟、衣不霑濡㊱。或有挾樂器者。帝方  
 食、爲之輟膳、命列坐於食案前㊲。帝問曰、「聞水底奏  
 樂、爲是君耶㊳。」老翁對曰㊴、「老臣前昧死歸訴、幸  
 蒙陛下天地之施㊵、卽息斧斤、得全其居㊶、不勝歡喜㊷。  
 故私相慶樂耳㊸。」帝曰㊹、「可得奏樂否。」曰、「故齋  
 樂來。安敢不奏。」其最長人便治絃而歌㊺。歌曰、「天  
 地德兮垂至仁、愍幽魄兮停斧斤、保窟宅兮庇微身、願天  
 子兮壽萬春。」歌聲小大、無異於人、清徹繞越梁棟㊻。  
 又二人鳴管撫節、調契聲諧㊼。帝歡悅㊽、舉觴竝勸曰㊾、  
 「不德不足當雅祝㊿。」老翁等竝起拜受爵㊽、各飲數升  
 不醉。獻帝一紫螺殼㊿。中有物、狀如牛脂。帝問曰㊽、  
 「朕聞無以識此物。」曰、「東方生知之耳。」帝曰㊽、「  
 可更以珍異見貽㊿。」老翁顧命㊽、取洞穴之寶。一人受  
 命㊽、下沒淵底㊽、倏忽還到㊽、得一大珠。徑數寸㊽、  
 明耀絕世㊽。帝甚愛翫㊽。翁等忽然而隱㊽。  
 帝問朔、「紫螺殼中何物㊽。」朔曰㊽、「是蛟龍髓㊽。  
 以傳面、令人好顏色。又女子在孕㊽、產之必易㊽。」會  
 後宮產難者㊽、試之、殊有神效。帝以脂塗面、便悅澤。  
 又曰、「何以此珠名洞穴珠。」朔曰㊽、「河底有一穴㊽、

深數百丈。中有赤蚌<sup>⑭</sup>、蚌生珠<sup>⑮</sup>。故以名焉<sup>⑯</sup>。帝既深歎此事、又服朔之奇識。（『書鈔』一百四十四、類聚八十四、廣記一百十八、御覽二十二（『窮神秘苑』引『幽明錄』）、八百五十、八百八十六、事類賦注九）※鄭晚晴輯注本一四六頁

【校異】①廣記無「與羣臣」三字。「羣」、御覽八五〇作「近」。書鈔、御覽二二、八五〇、八八六「央」下並有「殿」字。「於」、書鈔、御覽八五〇並作「于」、御覽八八六無此字。此句至既而息役、類聚、事類賦注不引。②校記云、「書鈔」一百四十四「御覽」八百五十引此二句與羣臣三字據補。御覽二二作「方食棗」三字。御覽八五〇無「方」字、「臚」下有「也」字。「臚」、廣記作「臚」。③御覽八八六無「人」字。此句以下、書鈔、御覽八五〇不引。御覽二二不引此句以下十九字。④「老臣冒死自訴不見其形尋覓良久」、御覽八八六作「老臣尋覓不見」六字。⑤御覽八八六「見」作「有」、「老翁」作「公」。御覽二二「梁上見」作「帝見梁上有」五字。⑥御覽八八六無此句。御覽二二不引此句以下四十八字。⑦御覽八八六無此句。⑧「拄」、御覽八八六作「柱」。⑨御覽八八六無此句。⑩「日」、御覽八八六作「之」。⑪御覽八八六不引此句以下一十六字。⑫「翁緣柱而下放杖稽首」、御覽八八六作「公下稽首」四字。⑬「嘿」、『古小說鈎沈』本作「默」、今據廣記改。御覽八八六無「嘿而」二字。⑭御覽二二作「仰觀屋宇」四字。御覽八八

六作「目仰視屋」四字。⑮「指」、御覽二二作「視」。⑯御覽二二不引此句以下二十六字。御覽八八六不引此句以下一十五字。⑰御覽八八六作「問東方朔」四字。⑱御覽八八六「日」上有「對」字。御覽二二作「東方朔曰」四字。⑲「居」、各本並無、今據『書鈔』卷一五八引祖台之『志怪』補。⑳廣記無「兼」字。校記云、「御覽」引有兼字。御覽二二作「此水木之精其名藻兼」。御覽八八六作「其名爲藻兼水木之精也」。『古小說鈎沈』本以「兼」字屬上句而爲「藻兼」、蓋從御覽二二。今從李劍國說改。廣記、御覽二二無「也」字。李劍國『唐前志怪小說輯釋』云、「蓋以〈兼〉字屬上句而誤爲〈藻兼〉耳（鈎沈正誤爲〈藻兼〉）。按『書鈔』引祖台之『志怪』作〈其名爲藻居、兼水木之精〉、是其名應作〈藻居〉、以藻爲居、正合〈夏巢幽林、冬潛深河〉之性。『廣記』『御覽』皆脫〈居〉字、今據『志怪』補正。」⑰御覽二二作「夏乃巢林」、御覽八八六作「夏巢林」三字。⑱御覽二二作「冬卽居河」、御覽八八六作「冬潛河」三字。⑲御覽八八六無「頃日類」三字。御覽二二不引此以下十三字。⑳御覽二二作「此來訴爾」。㉑校記云、「御覽」引作仰視屋者殿名未央也俯視脚者脚足也。魯迅所引御覽八八六也。御覽二二作「所視殿名未央下視脚者足於此也」。㉒廣記無「也」字。御覽八八六作「願止足於此也」。御覽二二無此句。㉓御覽二二、八八六無此句。㉔御覽二二作「上乃悉罷諸役」、御覽八八六作「帝爲此暫止」。

⑳校記云、「類聚御覽引竝作幸河渚。」御覽八八六作「少時幸河者」、類聚作「漢武帝幸河渚」、事類賦注作「漢武幸河渚」。此句以下、御覽二二不引。㉑類聚・事類賦注無「水底有」三字。「絃」、廣記・事類賦注作「弦」。廣記無「之」字。「聲」、類聚・事類賦注作「音」。㉒御覽八八六「前」上有「肴膳芬芳」四字、「翁」作「公」。「前梁上翁」、類聚作「俄而老公」、事類賦注作「有老翁」。類聚・事類賦注「人」下有「出」字。㉓校記云、「御覽引作裳。」御覽八八六作「帶」、鮑崇城本作「裳」。類聚・事類賦注無此句以下八字。㉔御覽八八六無此句。㉕類聚・御覽八八六・事類賦注竝無此六字。㉖類聚・事類賦注不引此句以下二百二十四字。㉗御覽八八六無此四字。㉘御覽八八六無「方食爲之輟膳」六字、無「列」字、「前」作「上」。校記云、「御覽引作上。」㉙御覽八八六無此十二字。㉚御覽八八六作「老公曰」三字。㉛御覽八八六無「天地之施」四字。㉜御覽八八六無「得」字、「居」下有「宅」字。㉝校記云、「御覽引作欣躍。」御覽八八六「歡喜」作「欣躍」。㉞「慶樂」、御覽八八六作「賀」一字。㉟以下五十三字、御覽八八六作「便治絃而」四字。㊱廣記無「治」字、「絃」作「弦」。㊲御覽八八六「清」上有「而」字、無「徹」「越」「棟」三字。㊳御覽八八六無此十一字。㊴「歡」御覽八八六作「欣」。㊵御覽八八六作「勸酒」二字。㊶御覽八八六不引此以下二十一字。㊷『古小説鉤沈』本無「受」字、今據廣記補。

㊸御覽八八六「獻」上有「乃」字。㊹御覽八八六不引此以下十七字。㊺御覽八八六「曰」上有「又」字。㊻「更」、御覽八八六作「思」。㊼「翁」、類聚・御覽作「公」。㊽御覽八八六無「受命」二字。㊾「沒」、御覽八八六作「波」。㊿類聚・事類賦注作「川」。㉀御覽八八六「倏」作「倏」、無「到」字。類聚・事類賦注無此四字。㉁御覽無「徑」字。㉂「耀」、御覽八八六作「耀」。㉃御覽八八六無此四字。類聚・事類賦注不引此以下六十八字。㉄御覽作「俄而公等忽然而去」。㉅御覽八八六無此九字。㉆御覽八八六「朔」上有「東方」二字。㉇御覽八八六「是」上有「螺殼中」三字、無「龍」字。㉈「孕」、御覽八八六作「草中用之」四字。㉉御覽八八六無「之必」二字。㊱「産難」、『古小説鉤沈』本作「難産」、今據廣記改。此以下、御覽八八六不引。㊲類聚・事類賦注「朔」上有「上問東方朔」五字。㊳事類賦注無「一」字。㊴「蚌」、事類賦注作「蚌」。㊵類聚作「生此珠焉」、事類賦注作「生此珠也」。㊶此句以下、類聚・事類賦注不引。【注釈】未央 未央宮。漢の高祖の七年(前二〇〇)に、蕭何が都長安に建てた宮殿(『漢書』高紀下、『史記』高祖本紀は八年に作る)。「後世の子孫がこれ以上壯麗にできないようにした」と蕭何が言うほどの豪華な宮殿であったが、武帝はそれを増築した。『三輔黃圖』卷二に「至孝武帝時、又増修」とある。養麗 黍などを混ぜた肉のあつもの。宴会のご馳走。『御覽』巻八五

○引『風俗通』に「今宴飲大會、皆先黍臠。」同引『榘衡別傳』に「黃祖在蒙衝舟、賓客作黍臠。」同引『竹林七賢論』（『世說新語』任誕篇劉孝標注引同）に「令爲他實設黍臠」とあるように、客をもてなす宴会のご馳走だったようである。李劍國『唐前志怪小説輯釋』には、「加黍米之肉羹。『説文』四下肉部（臠、肉羹也。）七上米部（糲）字段注（古之羹必和以米。）（臠）又作（臠）』という。冒死自訴 一命を賭して訴える。「冒死」は 臣下が皇帝に対して進言する時、畏敬の念を表す常套語。死罪を覚悟での意。面目頰皸 しわくちやの赤ら顔。「頰」は赤い色。拄杖僂歩 杖をついて背を曲げて歩く。篤老之極 非常に年老いた様子。「篤老」は、年老いた様。江藍生『魏晉南北朝小説詞語匯釈』に、この例を挙げて「篤老、指人疲頓衰老之貌。」という。不知何等 何のことか分からなかった。「何等」は「什么」「怎么」の意で、江藍生『魏晉南北朝小説詞語匯釈』に、「何等爲漢魏六朝人用語、使用十分普遍、」という。其名爲藻居、兼水木之精也 その名前を「藻居」と言い、水と木の精を兼ねているものです。李劍國『唐前志怪小説輯釋』の説に従って、祖台之『志怪』の文によって解釈する。注釈の項参照。頃日 近ごろ。『漢語大詞典』は、この文と南齊・張充「與尚書令王儉書」の「頃日路長、愁霖輻晦」を引き、「近日」の意に解する。李劍國『唐前志怪小説輯釋』は「盡日。（頃）

通（頃）、盡也。」と解する。仰頭看屋、而復俯指陛下脚者、足也。願陛下宮室足於此也 頭を上げて天井を見上げ、うつむいて陛下の足を指さしたのは、足ることです。陛下に宮殿はこれで十分とされるよう願っているのです。「御覽」八八六引の「殿名未央也」を補えば、前半部の意は「仰いで天井を見上げたのは、宮殿の名が未央（いまだつきない）ということ」となる。祖台之『志怪』は「仰視殿屋、殿名未央、訴陛下方侵其居宅未央也。俯指陛下脚者、足也、願陛下宮殿足於此、不願更造也。」（殿屋を仰視し、殿の名は未央、陛下の方に其の居宅を侵して未央、きざるを訴ふるなり。俯して陛下の脚を指すは、足るなり。陛下に宮殿此に足れりとなさんことを願ひ、更に造ることを願はざるなり）に作る。李劍國氏は『御覽』によって、本文に「殿名未央也」を補い、祖台之『志怪』の方が「文義較勝」と言う。幸瓠子河 瓠子河に行幸したとき。瓠子河は、当時、今の河南省濮陽市付近で黄河から別れて済水に注ぎ込んでいた川の名。『史記』河渠書、『漢書』武紀によれば、武帝は元封二年（前一〇九）、黄河の一部瓠子河の決壊箇所を修復し、「宣房宮」を造ったという。「瓠子歌」も作っている。祖台之『志怪』は「帝親幸河都」に作るが、「河都」は未詳。「類聚」卷八四、『事類賦注』卷九引『幽明録』が「河渚」に作るのと同じ系統の異文である。絃歌之聲 弦楽器に合わせて歌う声。『論語』

陽貨篇に「子之武城、聞弦歌之聲。」(子 武城に之き、弦歌の聲を聞く)とあり、文化教育の象徴として用いられる。水底から音楽が聞こえる話は、『異苑』卷七(228話)の「晉温嶠至牛渚磯、聞水底有音樂之聲。」(晉の温嶠牛渚磯に至り、水底に音樂の聲有るを聞く)などがある。**凌波** 波を乗り越える。曹植「洛神賦」(『文選』卷一九)に「凌波微歩、羅襪生塵。」(波を凌いで微歩すれば、羅襪塵を生ず)とある。**絳衣素帶** 赤い服と白い練り絹の大帯。「絳衣」は、「絳衣大冠」で將軍の服装を表すように軍服に用いられることが多い。「漢書」五行志下之上に「鄭通里男子王褒衣絳衣小冠、帶劍、入北司馬門、殿東門。」(鄭通里の男子王褒絳衣を衣小冠にて、劍を帯び北司馬門、殿の東門より入る)とあり、『後漢書』光武帝紀上に「光武絳衣大冠」とある。「素帶」は『礼記』玉藻に「天子素帶朱裏終辟。而素帶終辟。大夫素帶辟垂。」(天子は素帶朱裏終辟す。而して素帶終辟す。大夫は素帶して垂を辟す)へ鄭玄注云、「而素帶終辟、謂諸侯也。」とあるように、天子・諸侯・大夫の帯だった。**纓佩** 冠のひもとおび玉。宮中で天子に朝見する時の服装。**昧死歸訴** 一命を賭して訴える。「昧死」は、己が暗愚で死罪を犯す意。上奏文などに用いて畏敬の念を表す常套語。『戰國策』秦策一に「臣昧死望見大王」(臣昧死して大王を望見す)とある。「歸訴」は、おもむき訴えること。『宋書』卷七

九「文五王伝」竟陵王誕に「抱痛懷冤、冒死歸訴。」(痛を抱き冤を懷き、死を冒して歸訴す)とある。**天地之施** 武帝の恩徳が天地の恵みのようであるという意。**治絃而歌** 楽器の調子を整えて演奏し歌う意である。う。「治絃」は用例を見ないが、『中国古代十大志怪小説賞析』は「調好乐器、边弹边唱起来。」、『白話太平廣記』(北京燕山出版社)は「抚琴唱歌」、『文白对照太平廣記』(天津古籍出版社)「弹弦而唱」と訳す。**窟宅** 動物などが住む洞穴。左思「呉都賦」(『文選』卷五)に「顛覆巢居、剖破窟宅」(巢居を顛覆し、窟宅を剖破す)とある。**清徹繞梁棟** 清らかで澄みきった歌声が室内中に響き渡る。『列子』湯問に「韓娥東之齊、置糧。過雍門、鬻歌假食。既去、餘韻繞梁、三日不絶左右以、其人弗去。」(韓娥 東のかた齊に之き、糧置し。雍門を過ぎ、歌を鬻ぎて食を假ふ。既に去るに、餘韻梁欄を繞りて、三日絶えず。左右以へらく、其の人去らずと)とあり、「繞梁」は絶妙な歌声を表す言葉として使われ、陸機「演連珠」(『文選』卷五五)に「繞梁之音、實繁絃所思。」(梁を繞るの音は、實に繁絃の思ふ所なり)、沈約「詠箏」詩に「徒聞音繞梁、寧知顔如玉」(徒だ音の梁を繞るを聞くのみにして、寧んそ顔の玉の如きを知らんや)とある。**鳴管撫節** 笛を吹き拍子木を打つ。「鳴管」は管楽器を演奏すること、嵇康「声無哀楽論」に「操律鳴管」とある。「撫節」は節(拍子

取るための楽器）を打つこと、『列子』湯問に「撫節悲歌」、曹植「閨情」詩に「彈琴撫節、爲我絃歌。」（琴を彈き節を撫し、我が爲に絃歌す）とある。調契聲韻合奏の調和が絶妙である。「契」は「合」と同意。『中国古代十大志怪小説賞析』は「曲調契合、声音和谐。」「白話太平廣記」（北京燕山出版社）は「声調和谐、节奏齐整。」と訳す。雅贖 相手の贈与に対する敬辞。ここでは「誉め言葉」の意。『三国志』卷七臧洪伝に「前日不遺、比辱雅贖」（前日遺れず、比、雅贖を辱くす）とある。可更以珍異見贖 ほかにも珍しいものをもらえまいか。祖台之『志怪』は、「君可思以呉口贖之。」（君呉口を以て之に贖らんことを思ふ可し）に作り、武帝が東方朔にも何か贈るように言い、下文で、武帝が東方朔がもらった真珠をお金を渡して受け取ることになっている。悅澤 美しい色つや。『漢語大詞典』は「光潤悅目」と解する。陸雲「與平原書」に「久不作文、多不悅澤」（久しく文を作らず、多く悅澤ならず）とある。蚌生珠 はまぐりが真珠を生む。張衡「南都賦」（『文選』卷四）に「巨蚌函珠」（巨蚌 珠を函む）へ李善注云、楊雄蜀都賦曰、蚌函珠而擊裂。蚌與蚌同。とある。また、『淮南子』説山訓に「明月之珠、出於蠃蜃。」（明月の珠は、蠃蜃より出づ）へ高誘注云、「珠有夜光明月、生於蠃中。」汜論訓「明月之珠」許慎注云、「夜光之珠、有似明月、故曰明月。」「文選』卷一班固「西都

賦」「隨侯明月」李善注に詳説あり。、説林訓に「明月之珠、蠃之病而我之利。」（明月の珠は、蠃の病にして私の利なり）とある。奇識 抜群の知識。釋慧觀「修行地不淨觀經序」（全宋文卷六三）に「其人出世、奇識博達」（其の人世に出て、奇識博達）とある。『中国古代十大志怪小説賞析』は「出衆的才识」と訳す。【訓読】 漢の武帝 羣臣と未央に宴し、方に黍臚を噉ふ。忽ち人語を聞くに云ふ、「老臣 死を冒して自ら訴ふ」と。其の形を見ず。尋いで覓むること良久しくして、梁の上の一老翁の長八九寸なるを見る。面目 頰、鬚髪皓白にして、杖を拄ぎて僂歩し、篤老の極なり。帝問ひて曰く、「叟 姓字は何ぞ。居は何處に在るか。何の病苦する所ありて、來りて朕に訴ふるか」と。翁 柱に縁りて下り、杖を放ちて稽首し、嘿して言はず。因りて首を仰ぎて屋を視、俯して帝の脚を指し、忽然として見えず。帝 駭愕し、何等なるかを知らず。乃ち曰く、「東方朔必ず之を識らん」と。是に於いて方朔を召して以て告ぐ。朔曰く、「其の名を藻居と爲し、水木の精を兼ねるなり。夏は幽林に巢ひ、冬は深河に潜む。陛下 頃日頻に宮室を興造し、其の居を斬伐す。故に來りて訴ふるのみ。頭を仰ぎて屋を看て、復た俯して陛下の脚を指すは、足るなり。陛下に宮室の此に足れりとなさんことを願ふなり」と。帝之に感じ、既にして役を息む。

瓠子河に幸し、水底に絃歌の聲有るを聞く。前の梁

上の老翁及び年少のもの數人、絳衣素帯にして、纓佩甚だ鮮やかなり。皆長八九寸にして、一人の長尺餘なる有り。波を凌ぎて出づるも、衣沾濡せず。或いは樂器を扶む者有り。帝方に食ふに、之が爲に膳を緩め、命じて食案の前に列坐せしむ。帝問ひて曰く、「水底に樂を奏するを聞く、爲すは是れ君か」と。老翁對へて曰く、「老臣前に味死婦訴し、幸ひに陛下の天地の施しを蒙り、即ち斧斤を息められ、其の居宅を全くするを得、歡喜に勝へず。故に私に相慶樂するのみ」と。帝曰く、「樂を奏するを得可べきや否や」と。曰く、「故に樂を齎ちて來たる。安んぞ敢へて奏せざらんや」と。其の最も長ぜし人、便ち絃を治へて歌ふ。歌ひて曰く、「天地のごとき徳もて至仁を垂れ、幽魄を恐れみて斧斤を停め、窟宅を保ちて微身を庇ふ、願はくは天子壽の萬春ならんことを」と。歌聲の小大、人に異なる無く、清徹にして梁棟を繞越す。又二人管を鳴らし節を撫ち、調契ひ聲諧ふ。帝、歡悅し、觴を擧げて並びに勸めて曰く、「不徳にして雅贖に當たるに足らず」と。老翁等並びに起ちて拜し、爵を受け、各おの數升を飲むも醉はず。帝に一の紫の螺殻を獻ず。中に物有り、狀牛脂の如し。帝問ひて曰く、「朕、闇にして以て此の物を識る無し」と。曰く、「東方生之を知るのみ」と。帝曰く、「更に珍異を以て貽らる可し」と。老翁、顧みて命じて、洞穴の寶を取らしむ。一人命を受け、下りて淵底に没し、倏忽

にして還へり到り、一大珠を得。徑數寸にして、明耀絶世たり。帝甚だ愛翫す。翁等、忽然として隱る。

帝、朔に問ふ、「紫の螺殻の中は何物なるか」と。朔曰く、「是れ蛟龍の髓なり。以て面に傳くれば、人をして顔色を好くせしむ。又女子孕むに在れば、之を産むに必ず易し」と。會たま後宮の産むこと難き者、之を試みるに、殊に神效有り。帝、脂を以て面に塗るに、便ち悅澤あり。又曰く、「何を以て此の珠を洞穴の珠と名づくるか」と。朔曰く、「河底に一穴有り、深さ數百丈なり。中に赤蚌有り、蚌珠を生ず。故に以て名づく」と。帝、既に深く此の事に歎じ、又朔の奇識に服す。

【訳文】 漢の武帝は群臣と未央宮で宴会を開き、ちようとご馳走を食べていた。すると突然話し声が聞こえてきて、「老臣、一命を賭して申し上げます」と言った。姿は見えなかった。しばらく探し続けていると、梁の上一人の身のたけ八、九寸(約二〇cm)の老人を見つけた。しわくちゃの赤ら顔、鬚も髪も真っ白で、杖をついて腰をかがめて歩き、非常に年老いた様子だった。武帝は、「老人の名前は何かというのか。住まいはどこにあるのか。何の困苦があつて、朕に訴えに来たのか」と尋ねた。老人は柱をつたって下りてきて、杖を捨て頭を床につけ拝礼したまま、一言も言わなかった。やがて顔をあげて天井を見上げ、うつ向いて帝の脚を指さし、ふいに姿が見えなくなった。武帝は驚いて、何のことか分からなかつ

た。そして「東方朔はきつと知っているであろう」と言  
 った。そこで東方朔を呼び出して話した。東方朔は、「  
 その名を藻居といい、水木の精を兼ねそなえています。  
 夏は奥深い林に住み、冬は深い川底に潜んでおります。  
 陛下はこのごろさかんに宮室を造営し、彼の住まいであ  
 る林の木を伐採してしておられます。だからやって来て  
 訴えたのです。天井を仰視し、うつ向いて陛下の脚を指  
 さしたのは、「足る」（もう十分だ）という意味です。  
 陛下が宮殿はもうこれで十分だと思われれることを願つて  
 いるのです」と言った。武帝はこれに感じ入り、やがて  
 造営工事を中止した。

武帝が瓠子河に行幸したとき、水底から弦歌の音が聞  
 こえてきた。まもなく、さきの梁の上の老人と年少の者  
 数人が、赤い衣に白い帯で現れ、冠のひもとおび玉は、  
 大変鮮やかであった。皆身の丈八、九寸であったが、一  
 人だけ一尺余りの者がいた。波を越えて出てきたのに、  
 衣服は濡れていなかった。中には楽器を抱えている者も  
 いた。武帝はちように食事をしていたが、食べるのを止  
 めて、彼らを食卓の前に並んで座らせた。武帝が、「水  
 底で音楽を演奏するのを聞いたが、あれはそなたたちが  
 奏でていたものか」と尋ねた。老人は、「老臣が以前に  
 恐れ多くも訴え出ましたところ、幸ひにも陛下のこの上  
 ない恩恵を蒙り、すぐに伐採を中止され、我々の住まい  
 を保つことができ、あまりの嬉しさにたえきれませんで

した。そこで、内々で祝宴を開いていたのです」と答え  
 た。武帝が、「ここで音楽を演奏できるか」と言うのと、  
 老人は、「わざわざ楽器を持ってきたのです。どうして  
 演奏しないことがありますようか」と言った。その中の  
 最も背の高い人がすぐに弦の調子を合わせて歌った。歌  
 は次のようだった。

天地のごとき徳でこの上ない仁愛を施され

かほそき心を憐れまれて伐採を中止され

我が洞穴を保護し我らの身を庇護された

天子の齢が永遠であることをお祈りします

歌声の大きさは、人と異なることはなく、清らかに澄み  
 きつた声が室内中に響き渡った。また二人が笛を吹き拍  
 子木を打ち、合奏の調和は絶妙であった。武帝は感激し  
 て喜び、杯を挙げて皆に勧めて、「朕は不徳でお褒めの  
 言葉にあうものではない」と言った。老人たちは皆立ち  
 上がり拝礼して杯を受け、それぞれ数升を飲んだが酔わ  
 なかった。そして武帝に一つの紫の巻き貝の殻を献上し  
 た。中に物が入っていて、牛の脂のようだった。武帝が、  
 「朕は無学でこれが何なのか分からない」と問うと、老  
 人は、「東方先生がご存じです」と答えた。そこで帝が、  
 「ほかに珍しいものをもらえまいか」と言うのと、老人  
 は振り返って、洞穴の宝を取ってくるように命じた。一  
 人がその命を受け、淵の底に潜り、あつという間に戻っ  
 てきて、一つの大きな真珠を持ってきた。直径が数寸あ

り、その輝きはこの世のものとは思えなかった。帝は大変気に入った。老人たちは突然姿を消した。

武帝が東方朔に、「紫の巻き貝の中の物は何か」と問うと、東方朔は、「それは蛟龍の髓です。それを顔に塗れば、顔色を美しくします。また女子が妊娠しているときには、お産が軽くなります」と言った。たまたま後宮で難産の者がいたので、試したところ、大変すぐれた効果があった。武帝がその脂を顔に塗ったところ、すぐに美しい色つやになった。また武帝が、「どうしてこの真珠を洞穴の珠と名づけるのか」と問うと、東方朔は、「河の底に一つの穴が有り、深さは数百丈です。その中に赤いはまぐりがいて、それが真珠を生みます。だからその名づけたのです」と答えた。武帝はこのことに深く感じ入るとともに、また東方朔の抜群の知識に感服した。

【補説】 この話は、第28話と同様、東方朔伝説の一つであるが、林と河の精霊が小さな老人の姿で出現しているところからは、河底に別世界が想像されていたことがうかがえる。自然神に対する民間信仰が、漢の武帝と東方朔に関する神仙説話に吸収されてきた話であろう。勝村哲也氏は、秦始皇帝の山林濫伐のことを述べ、「始皇帝によって一段と強められた自然破壊は、漢の武帝の時代に到って頂点を迎えるという一つの推定」を提示されている（『中国中世共同体試論』、一九八〇年『東方学報（京都）』第五二冊所収）が、この話もそれに関連

があると思われる。林の精霊が小さな老人の姿で出現し、漢の武帝の山林濫伐による自然破壊に警告したものとも考えられるのである。

この話は、祖台之の『志怪』と任昉『述異記』にも収録されているので、以下に掲載しておく。

○祖台之の『志怪』（『古小説鉤沈』所収）

漢武帝與近臣宴會於未央殿、忽聞人語云、「老臣冒死自陳。」乃見屋梁上有一老翁①、長八九寸、拄杖僂歩、篤老之極。緣柱而下、放杖稽首、嘿而不言②。因仰首視殿屋、俯指帝脚、忽然不見。東方朔曰、「其名藻居、兼水木之精、春巢幽林、冬潛深河。今造宮室、斬伐其居、故來訴於帝。曰仰視殿屋③、殿名未央、訴陛下方侵其居宅未央也。俯指陛下脚者、足也、願陛下宮殿足於此、不願更造也。」上爲之息宮寢之役。

居少時、帝親幸河都、聞水底有絃歌之聲④、又有善芥。須臾、前梁上老翁及年少數人、絳衣素帶、纓佩乘藻、甚爲鮮麗、凌波而出、衣不沾濡。帝問曰、「聞水底奏樂聲、爲君耶。」老翁對曰、「老臣前昧死歸訴、幸蒙陛下天地之施、即止息斧斤、得全其居宅、不勝嘉歡、故私相慶樂耳。」獻帝一紫螺殼、狀如牛脂。帝曰、「朕聞無以識君。」東方生知耳。「君可思以具口貽之。」老翁乃願命取洞穴之寶⑤、一人即受命下沒泉底⑥、倏忽還到、奉大珠徑寸、明耀絕世。帝甚翫焉。

問朔、「何以識此珠爲洞穴之寶。」朔曰、「河底有洞穴

之寶。」帝以五千萬錢賜朔⑦、取其珠。「書鈔一百五十八」

①鈎沈本無老字、據書鈔補。②嘿、鈎沈本作默。據書鈔改。③殿屋、鈎沈本作宮殿。據書鈔改。④絃、鈎沈本作弦。據書鈔改。⑤鈎沈本無寶字、據書鈔補。⑥没、書鈔作汲。今從鈎沈本。⑦千、鈎沈本作十。據書鈔改。

○任昉『述異記』（卷下）

漢武宴於未央宮、忽聞人語云、「老臣負自訴。」不見其形。良久、見架上一老翁、長八九寸、面黧鬚白、拄杖僂步至前。帝問曰、「叟何姓名。所訴者何。」翁緣柱放杖、叩頭不言。因仰視屋、俯視帝脚、忽不見。帝駭懼、問東方朔。朔曰、「其名爲藻、兼水木之精也。陛下頃來頻興宮室、斬伐其居。故來訴耳。仰頭看屋、而後視陛下脚者、願陛下宮室足於此、不欲更造。」帝乃息役。

後帝幸瓠子河、聞水底有絃歌之聲、置肴膳芬芳於帝前。前梁上翁及數年少、絳衣紫帶、佩纓。皆長八寸、一人最長、長尺餘。凌波而出、衣不沾濕。或挾樂器。帝問之曰、「向所聞樂、是公等奏耶。」對曰、「臣前昧死歸訴、蒙陛下息斤斧、得全其居。故相慶樂耳。」遂奏樂、獻帝洞穴珠一枚、遂隱不見。

帝問方朔、「何謂洞穴珠。」朔曰、「河底有一穴、深數百丈。中有赤螭、螭生此珠、徑寸、明耀絕世矣。」帝遂寶愛此珠、置於內庫。」（漢魏叢書本）

32 漢武帝以玄豹白鳳膏磨青錫屑、以酥油和之爲鏡。雖

雨中鏡不滅。（類林雜說十三）※鄭晚晴輯注本一九三頁

【注釈】玄豹 黒豹。司馬相如「子虛賦」（『文選』卷七）の「白虎玄豹」李善注に「又（山海經）曰、幽都之山、其上有玄豹。郭璞曰、黒豹也。」（『山海經』海內經）とある。白鳳 白い鳳凰、伝説上の神鳥。『太平廣記』卷六一引『西京雜記』に「雄著玄、夢吐白鳳皇集上、頃之而滅。」（今『西京雜記』卷上作「雄著太元經、夢吐鳳凰。集元上、頃之而滅。」）とある。揚雄が『太玄經』を著述したとき、夢の中で白い鳳凰を吐き出し、鳳凰は『太玄經』の上にとまって、しばらくして消えたという。酥油 牛羊の乳から作った油。爲鏡 灯火の油とする。「鏡」は「燈」と同じ。

【訓読】 漢の武帝 玄豹白鳳の膏を以て青錫を磨きて屑とし、酥油を以て之に和して鏡と爲す。雨中と雖も鏡滅せず。

【訳文】 漢の武帝は玄豹と白鳳の膏で錫をみがいて粉にし、酥油をに混ぜて灯火の油とした。雨の中でも灯火が消えなかった。

【補説】 この話は、『初学記』卷二五「燈」引『洞冥記』に見え、「漢武帝以丹豹髓・白鳳膏、磨青錫爲屑、以淳蘇油和之、照於神壇。夜暴雨、火光不滅。」（『顧氏文房小説』所収『漢武帝別國洞冥記』卷一は「帝既耽於

靈怪、常得丹豹之髓・白鳳之膏、磨青錫爲屑、以蘇油和之、照於神壇。夜暴雨、光不滅。」と作る。王國良著『漢武洞冥記研究』（文史哲出版社、一九八九年）参照。

33 董仲舒嘗下帷獨詠①。忽有客來②。風姿音氣、殊爲不凡。與論五經、究其微奧③。仲舒素不聞有此人、而疑其非常④。客又曰、「欲雨⑤。」仲舒因此戲之曰⑥、「巢居知風⑦、穴居知雨⑧。卿非狐狸、卽是鼯鼠⑨。」客聞此言、色動形壞、化成老狸⑩、蹶然而走⑪。〔廣記四百四十二、御覽九百十二〕※鄭晚晴輯注本六三頁

【校異】 ①廣記「董」上有「漢」字。「嘗」、御覽作「常」。②御覽無「忽」字、「來」下有「詣」字。③此四句、御覽作「語遂移日」四字。④此二句、御覽作「舒知其非常」。⑤校記云、「五字『廣記』引無。」「曰」、御覽作「云」、鮑崇城本作「曰」。⑥「古小說鈎沈」本無「仲舒」二字、今據御覽・鮑崇城本補。此句、廣記作「乃謂之曰」四字。⑦「知」、廣記作「却」。⑧「居」、廣記作「處」。⑨「卽」、御覽作「則」。⑩「鼯」、廣記作「老」。⑪御覽「老」下有「狐」字、「狸」下有「也」字。⑫御覽無此四字。

【注釈】 董仲舒 前一七九—前一〇四。春秋字を修め景帝の時に博士となり、武帝の時、儒家の学説を国学とした。『春秋繁露』を著す。『史記』卷一二一、「漢書」卷五六に伝がある。下帷獨詠 帳をおろして一人で詩歌

を詠ず。学問に専念することをいう。『漢書』卷五六董仲舒伝に、「下帷講誦、弟子傳以久次相授業、或莫見其面。蓋三年不窺園。其精如此。」（帷を下して講誦し、弟子傳ふるに久次を以て相業を授け、或いは其面を見る莫し。蓋し三年園を窺はず。其の精なること此くの如し）とある。風姿音氣 風貌と声の様子。『抱朴子』審學に「風姿豐偉、雅望有餘」、『論衡』是應に「人含五常、音氣交通。」とある。巢居知風、穴居知雨 巢に住む者は風を予知し、穴に住む者は雨を予知する。『文選』卷二九張華「情詩」の「巢居知風寒、穴處識陰雨」李善注に「春秋漢含孳曰、穴藏先知雨、陰暄未集、魚已噉啣。巢居之鳥先知風、樹木搖、鳥已翔。韓詩曰、鶴鳴于埳、婦欺于室。薛君曰、鶴、水鳥。巢處知風、穴處知雨。天將雨而蟻出壅土、鶴鳥見之、長鳴而喜。」（『春秋漢含孳』に曰く、「穴に藏るるものは先んじて雨を知り、陰暄未だ集らざるに、魚已に噉啣す。巢に居るの鳥は先んじて風を知り、樹木搖らぐとき、鳥已に翔る」と。『韓詩』へ幽風東山に曰く、「鶴は埳に鳴き、婦は室に欺ず」と。薛君曰く、「鶴は、水鳥なり。巢處は風を知り、穴處は雨を知る。天將に雨ふらんとして蟻壅土より出で、鶴鳥之を見て、長鳴して喜ぶ」とある。また、『漢書』卷七五奉翼伝にも「臣奉竊學齊詩、聞五際之要十月之交篇、知日蝕地震之效昭然可明。猶巢居知風、穴處知雨、亦不足多、適所習耳。」（臣奉竊かに齊詩を學

び、五際の要「十月之交」篇を聞き、日蝕地震の效昭然として明らかにす可きを知る。猶ほ巢居の風を知り、穴處の雨を知るがときも、亦た多とするに足らず、適に習ふ所のみ」とある。 鼯鼠 小さな鼠。「説文」に「鼯、小鼠也。」とある。 蹶然 驚きあわてて立ち上がる様。「禮記」孔子閑居に「子夏蹶然而起。」（子夏蹶然として起つ）とある。

【訓詁】 董仲舒 嘗て帷を下して獨り詠す。忽ち客の來たる有り。風姿音氣、殊に凡ならずと爲す。與に五經を論ずるに、其の微奥を究む。仲舒 素より此の人有るを聞かず、而して其の常に非ざるを疑ふ。客又曰く、「雨ふらんと欲す」と。仲舒 此に因りて之に戯れて曰く、「巢居 風を知り、穴居 雨を知る。卿 狐狸に非ずんば、即ち是れ鼯鼠ならん」と。客 此の言を聞き、色動き形壞れ、化して老狸と成り、蹶然として走る。

【訳文】 董仲舒があるとき帷を下して獨り詩歌を詠じていた。すると突然客人がやって来た。風貌や声の様子は、とても凡庸とは思えなかつた。一緒に五經について論じたところ、奥深いところまで究めていた。仲舒は平素そのような人がいるとは聞いていなかった。常人ではないと疑った。また客人が、「雨が降りそうだ」と言った。そこで仲舒はふざけて、「巢に住む者は風を予知し、穴に住む者は雨を予知すると言います。あなたは狐狸でなかつたら、小ネズミでしょう」と言った。客人

はこれ聞いて、顔色が変わり形相を崩して、狸となつて、あわてて逃げていった。

【補説】 この話は、董仲舒が三年間帷をおろして学業に専念したことに関連して語られたものであろう。狐狸が学問に精通していることは、唐代になると、狐が『文選』を講義する（『太平広記』巻四四七「張簡」出『朝野僉載』）話などに見られるが、これはその原型といえるものである。なお、この話は、『搜神記』卷一八（第四二〇話）、「珣玉集」卷一二にも見える。

#### ○『搜神記』

董仲舒下帷講誦、有客來詣。舒知其非常。客又云、「欲雨。」舒戲之曰、「巢居知風、穴居知雨。卿非狐狸、則是鼯鼠。」客遂化爲老狸。

#### ○『珣玉集』

「巢居知風、穴處知雨。卿非狐狸、則是其甥舅耳。」客聞此語、色動形戰、即化爲老狸、而走也。出前漢書。『珣玉集』が、「出前漢書」というのは、注釈に挙げた『漢書』卷七五奉翼伝と混同したものと思われる。

（続）